

先ず実習に入る前に、配色のこつであるまとめるか変化させるかの考え方を色相環とトーン図を使って説明し、用意した配色例を示しながら解説した。

実習が始まると参加された方達は初めて手にした350色もの見本帳にも臆することなく素早く色を探し出し、用意した台紙に貼り込むためそれぞれ目的にあった配色を楽しそうに選択していた。選んだ配色を周りの方と比較しながら自分の選ぶ色の傾向を改めて実感したり、中には非常に個性的な配色をなさる方もいて、それらを皆様に紹介したりして和やかな中に講座は進み、質問の手も沢山上がった。

あっという間に予定の時間となり、まとめの話へと急ぐ私たちに少々の時間の超過なんか気にしていませんよ、とばかり参加者の皆様のまなざしは暖かく、大きなうなずきにカづけられて無事講座を終える事が出来た。

参加者からは、「今まで洋服を選ぶ時は店員に勧められるままだったが、今後は今日の講座を参考に配色を考え自ら選んでいきたい。」「若いときは忙しく色には無頓着だった。今日の講座を契機に色彩についても考えていきたい。」「色見本帳を購入し自宅でも勉強したい。」などの声が聞かれ皆様から私共の方が学ばせて頂いたことも多く充実した一日だった。

最後に、配色実習に際して、乃一香織さん、山田昌美さん、三輪佳子さんが快くサポートを引き受け皆様の質問に細やかに応じていただいたことに心から感謝いたします。(群馬のColor風)

公開講座「歯科の色彩の現在：歯は白い？ 歯科と色のトレンド」

実行委員 元香 昭夫

澄んだ瞳と白い歯は古来より美人の形容で、明眸皓齒とは歯の美しさに対する歯科医学の審美的要素として現在もっとも重要視されている。

歯科医学は歯科材料の挙動について色彩の基礎的研究を重視する傾向があった。

歯の色は隣接する歯の色にあわせるためのシェードマッチングが日常的に行われ、更に歯を人工的に白くする漂白治療などいずれも色彩学的テーマとして密接に関係する。

この度、日本色彩学会第34回全国大会[新潟] 03における市民公開講座で「歯科の色彩の現在：歯は白い？ 歯科と色のトレンド」というテーマにより日本歯科色彩学会、日本歯科大学新潟歯学部、明倫短期大

学の協賛を得て、現在の歯科と色彩にもっとも造詣の深い3名の先生方(明海大学名誉教授、日本歯科色彩学会会長、日本色彩学会会員、片山伊九右衛門先生；「歯科の色彩」、日本歯科大学新潟歯学部教授 同大学大学院新潟歯学研究所科長、日本歯科色彩学会常任理事、加藤 喜郎先生；「歯の漂白と白さについて」、明倫短期大学、日本歯科色彩学会会員、日本色彩学会会員、木暮ミカ先生；「歯を美しく見せるデンタルカラーコーディネート」)を講師に、それぞれのテーマの司会進行をカラーランド研究所、日本歯科色彩学会副会長、日本色彩学会会員の元香により開催された。以下要約。

片山講師；審美には大きく分けて形態、機能、色彩の3部門があって、色彩はその中の1部門にあり、多くは物理学の範疇と考えられがちであるが、心理学、生理学、化学などの基礎学問、環境工学などの応用面、ファッション、デザインなどの感性面、さらに歴史をふまえた総合的な学問で、日本歯科色彩学会は10年前に、これらをもとに歯科医学、歯科医療に貢献するために設立しました。

加藤講師；歯の治療は患者とのコミュニケーションが大事で、患者さん夫々の顎形態に対して適切な審美的修復が行われ、漂白の効果も単純な色彩の白を目指すのではない形で行っている。このような背景として大学に通院する患者の意識調査や歯の治療に対する細やかなアンケートから今後の歯科治療に役立てることが、美しい歯の色を考える要因と考えている。

木暮講師；歯を白くするホワイトニングが割とポピュラーな治療法として脚光を浴びておりますが、局所的な白さのみを追求するあまり、顔面をトータルにカラーコーディネート出来ていないケースも多々見受けられるように思われ、患者さんの顔面を魅力的にするという点で疑問に思われるケースもあります。歯を治療する際の審美性について、特に顔面における色の健康的な調和という観点から、総合的な色の調和を図るにはどうすべきかと話された。

(カラーランド研究所)

公開講座：「動きが生みだす視覚世界-右脳発掘のヒント」

実行委員 松田 陽子

本講座は、新潟県教育委員会の後援のもと、小町谷朝生先生(文星芸術大学教授、色彩学会副会長)、並

びに栗野由美先生(東京造形大学助教授、色彩学会会員)の指導により、主に小中学校の先生方を対象として開催された公開講座である。

初めに、小町谷朝生先生より色彩と動きとの拘わりについてご講演いただいた。視覚体験を通して目の動きの基本を探索しながら、驚きと興味の尽きることない右脳知覚の世界へとナビゲーションしていただいた。以下に要旨を報告する。

《凸レンズを備えた我々の目の見え方世界は一点中視主義であり、それをサポートするように脳は発達し分化してきた。右脳機能は空間情報や動き情報を扱い、全体を瞬間に掴むトップダウン型である。形・色情報は分離可能で、対比現象や立体視を作り出し、ゲシュタルト的見方で形を捕える。一方、左脳機能は言葉化と静止画像情報による細部の吟味を得意とするボトムアップ型である。形・色やテクスチャー情報はセットアップされ、表色系的に色を捕え、観念芸術を理解する。

色は単独では広がり-透明化し-消える。輪郭によって形が現われ-位置感を持ち-不透明になる。「標本：たくさんの虹」の薄い色の縞柄は、重ねると線の干渉により色々な色が現われ、動かし交叉させると輪郭が与えられて単独で見る時より強い色が認められる。「標本：踊る四辺形」の折れ曲がった縞柄には、ミューラー=リャーやポグゲンドルフ錯視と同様、三角形の鈍(鈍角)と錐(鋭角)の力が働いている。ここに動きが加わると、平行四辺形が輪郭を持って浮上し、踊っているかに見える。こうして一度左脳が認めた形は仕組みを取り去っても強く残る。左右の目と左右の脳の共働状態によって、色だけで単独に存在できる可能性は残されている。最後の観察、「標本：等色化現象」の色帯に、丸穴が数個空いた紙を被せると、丸い輪郭内には左脳的表色系の色相分類とは別の、より大きな括りの色の違いが現われる。ここに右脳的な色分類の成立が推察される。これは、恐らく日本で初めてのデモンストレーションである。》

引き続き、栗野由美先生に『こどもにもできるコンピューター・アニメーション』をテーマに、映像玩具やアニメーション装置の数々を歴史を繙きながらご紹介いただいた。教育の場で教材や工作のテーマとして取り上げれば、動きを見る知覚の仕組みを、子供たちと共に興味を膨らませながら楽しく理解できるだろうとのご提案である。第二部の制作実習編では、一般的なパソコンソフトを用いてアニメーシ

ョン作りの手順を解説いただきワークショップに入った。パソコン、デジカメ、手書きイラストなどで紙製円盤に数コマのアニメーションを描き、フェナキスティスコープ(驚き盤)を作った。約3時間かけて参加者は思い思いの作品を完成させ、心を弾ませながら鏡に映し出される自作アニメの動きに見入っていた。

参加いただいた先生方には、是非このワクワク・ドキドキを子供達と共有していただきたいと願っている。

(Color Institute MeMe)

公開講座：「“快適なまちづくり”のための色彩設計手法－建物・地域の色を考える－」

副実行委員長 長谷川 博士

新企画として学会の活動成果を地元の方々と共に共有する“公開講座”を検討するなかで、『環境色彩計画』はすぐに候補のひとつに挙がった。ただ、学会として発表するテーマがあっても地元の方々に関心を持っていただけるか、また関心をもっていただけるテーマだとしてもどのようにして告知し集客するのか、問題は少なくなかった。

さいわい、新潟県下の上越市が「環境色彩ガイドライン」を最近施行していたことから、〈まちづくり〉に焦点を絞った企画書を作成し、新潟県(土木部都市局)に協力を仰ぐべく、久下実行委員長(支部長)・八木橋事務局長ともども県庁を訪問した。2月中旬のことである。

訪問後10日もしないうちに、[後援]という形で公開講座の案内&集客をご担当いただけるとのご返事をいただき、本格的に準備活動がスタートした。協力を要請した関係上、案内パンフの原案作りからもろもろの調整まで学会側の担当となったが、5月のGW明けには定員の80名を超える申し込みがあり、お断りに窓口の新潟県を困らせるといううれしい?誤算もあつたりと驚きの連続であった。

講座は、当日75名の参加者をお迎えし、前半を『景観における色彩の重要性』・『環境色彩計画の考え方進め方』(長谷川担当)、後半を『各地の環境色彩ガイドラインの採用事例』(担当永田泰弘氏)の構成で、長野県白馬村・地元上越市・相模原市・川崎市など日本各地の環境色彩ガイドラインの採用事例を役所が作成した小冊子を配布するとともに、スライドを